説教「真の神は生きている」

詩編一一五・四～八
ヨハネ一四・一九
牧師　森田恭一郎

今日は教会学校のカリキュラムに従って、十戒尾の二番目「**あなたはいかなる像も造ってはならない**」がテーマです。十戒の初めには神様ご自身の自己紹介があります。「**私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である**」(出エジプト二〇・一)。

そういう生きて働かれる神様だから、その神様を像にしてはいけません。それなのに、今日の聖句カード(二〇二六年度№32)を見てみましょう。



これから何か岩を刻んで像を造ろうとしています。皆さんは何か造ろうと思いますか。どのような像を造ろうとしたのでしょう。もちろん造ってもいい像と悪い像がある訳ではありません。いかなる像もいけません。何故なら、神さまは生きておられるお方だからです。像にはしてはいけません。それで造ってはならないと語りかけて下さったのですね。

私たち日本人がよく造る像を紹介しましょう。これです(スケッチブックの絵を見せながら)。招き猫です。よくあるのは、目をギラッ開けて百万両の小判を手にした猫が多いようですが、礼拝の印象を悪くしないように、この絵では、表情も可愛く、小判の代わりに「幸せ来い来い、やって来い」。この気持ちは誰もが心の内に持っていますよ。それで人間の願いを像にして、それを神様の像にして拝んでしまう。もし、大きな目をギラッと開けた小判を抱える招き像をこの礼拝堂に置いたらどんな気分ですか？　何とおぞましいことか。

像は生きていません。今日の聖書はこう語っています。**国々の偶像は金銀にすぎず、人間の手が造ったもの。口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかぐことができない。手があってもつかめず、足があっても歩けず、喉があっても声を出せない。偶像を造り、それに依り頼む者は、皆、偶像と同じようになる**(詩編一一五・四～八)。この招き猫はどんなに可愛くても、話すことも、見ることも、聞くことも、嗅ぐことも、掴むことも、歩くことも、声を出すことも、全然出来ません。作り物で生きていないからです。拝むものではありません。

それなら生きている、どういう事でしょうか。次の画面は、生きた犬の写真です。



時折、教会の前を散歩している方の写真です。許可を得てお見せしています。右側の犬はしっかりと立っていますが、左側の犬はもう歩くのを嫌がって、車椅子に乗っています。足が不自由です。でも、この飼い主さんが愛情を注いで可愛がっています。だからこの二頭とも飼い主さんに慣れ親しんでとっても懐いて(なついて)います。**飼い主は愛情を注ぎ、犬は可愛く懐く、共にいることを嫌がらない…どころか、一緒にいるのを喜んでい**

る。これが飼い主と犬の、生きた者同士の関係です。これはペットの話です。

それでは神様のイエス様はどうでしょうか。こうお語りになりました。「**私が生きているので、あなた方も生きることになる**」（ヨハネ一四・一九）。次の聖句カード（二〇二一年度No 31）、主イエスが子どもたちを祝福している場面の絵です。



そうです。イエス様が「私のもとに来なさい」とお招きして、子どもたちを、どのような子どもたちをも祝福しています。それで子どもたちも親御さんも喜んでイエス様の下に駆け寄っています。イエス様は生きています。そして子どもたちも生き生きして、親御さんも喜んでいます。みんな有り難うの気持ちですね。「**私が生きているので、あなた方も生きることになる**」ということです。像を造らないで、生きておられるイエス様の祝福に包まれている。皆さんも生き生きする。これが教会の礼拝にふさわしいです。像なんか要らない。

ところで終わりにもう一つ。今日、招きの言葉で読みましたが十戒をこう記します。「**あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない**」（口語訳）。自分のために利用するとそれは像になりますよ、と語っているようです。刻んだ像は造らなくても、イエスを私たち自分のために用いるなら、イエス様を像にしてしまっています。そうではなくて、そしてイエス様の下に走り寄って「私をささげます。私を用いて下さい」。祝福の恵みを下さって、いつも共にいて下さり有り難うございます、の気持ちが大事です。「**栄光、神に在れ**」。